

歴史学における状況証拠による推論の信頼性

苗村弘太郎 (Kotaro Namura)

京都大学

証拠に関する諸問題は科学哲学において注目を浴び続けている問題の 1 つである。その一方で、証拠の取り扱いに関する問題は歴史学の方法論において伝統的に重視されてきた問題である。歴史学の入門書や方法論を取り扱う本にはしばしば証拠に関する章が設けられていることからこのことは見て取れる。それにも関わらず、歴史学における証拠に関する哲学的考察が十分になされてきたとは言い難い。考察の歴史は比較的早く、哲学者による証拠の問題に対する検討の先駆けである Collingwood(1956) *The Idea of History* における「歴史的証拠」と題された章以来、様々な検討が存在するものの、哲学者による注目を浴びてきた領域とは言い難い。

歴史学における証拠に関わる問題として注目されるのが、直接証拠と、状況証拠ないし間接的証拠との区別に関わる問題である。歴史学の入門書や論文において、状況証拠による推論はしばしば信頼性の劣るもの、あるいは推奨されないものとしての言及を受ける。その一方で、状況証拠の重要性、状況証拠の利用の不可避性を訴える記述も伝統的な政治史の研究書に見られる。加えて、状況証拠に訴えた推論が、後の研究者によって十分な信頼性を持つと評価される場合も存在する。状況証拠による推論はその利用を慎むことがしばしば推奨されるにも関わらず、時には信頼できる推論を生み出しているのである。このようにして、状況証拠による推論が信頼できる推論となることはどのようにして可能になっているのかということが問題として浮上してくる。

そこで本発表は、いかにして状況証拠による推論が信頼できるものとなるのかという問題に答えを与えることを目指す。この問題に答えるためには、状況証拠による推論が信頼できると判断される際、状況証拠（による推論）とは何を意味しているのかを見定めることが必要になる。そのために、歴史学の入門書などにおける状況証拠への言及例から候補となる定義の検討を行う。この定義を踏まえた上で、状況証拠による推論が信頼できるのはいかなる条件においてであるのかについて検討を行う。歴史学における推論の信頼性に関する哲学的議論に対して、ベイズ主義の立場から検討を行うことによって、状況証拠による推論が信頼できる条件について提言を行う。